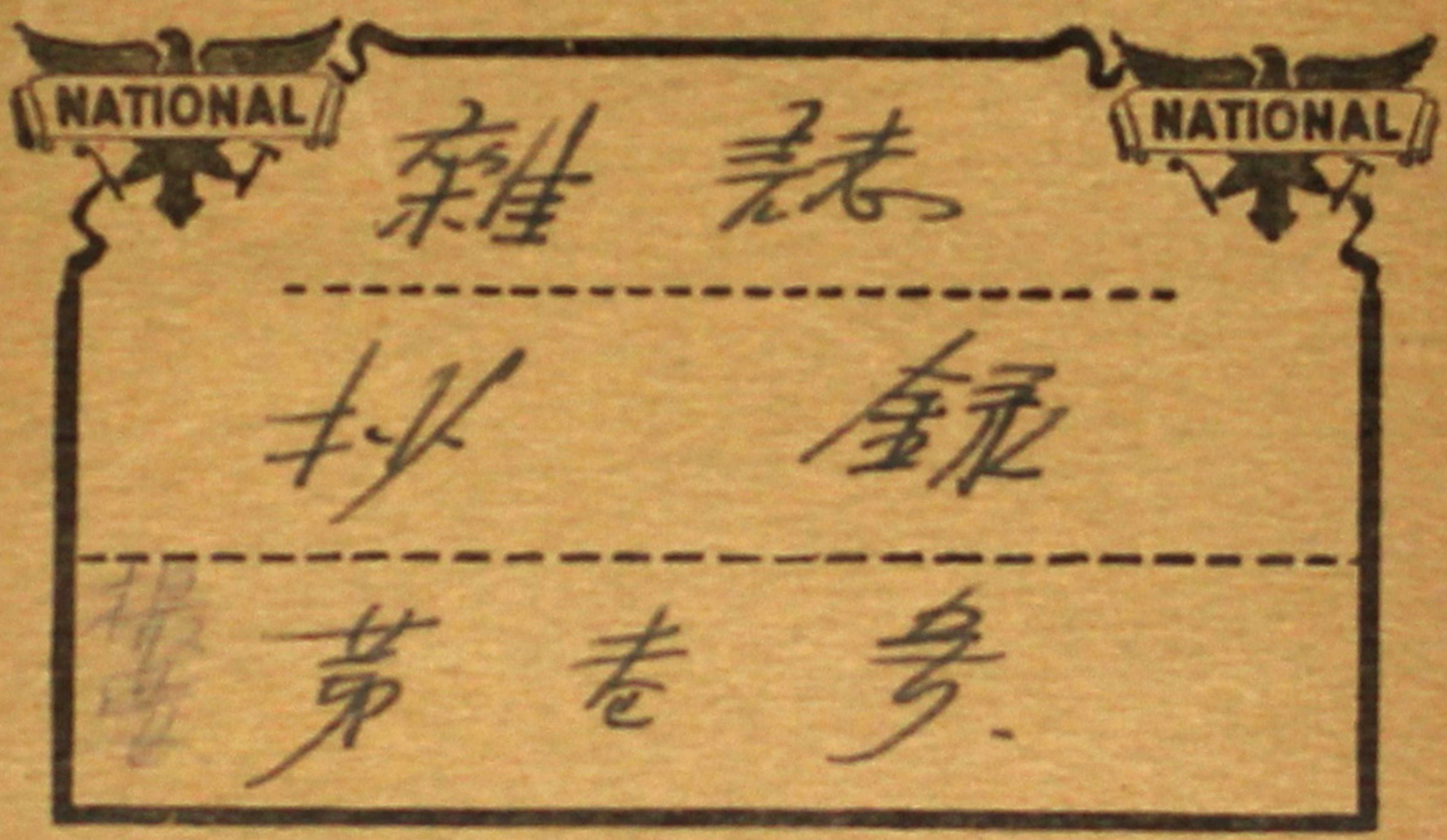
— EXTRACTS —

— FROM —

"MAGAZINE"

NO 1.



No. 3758

June 19 - 1930.

疑い深い。

替へる

文をさへる

左手をあげる

富士、現代、文藝展覧会、
庭園、其他の雑誌より
自ら好きな文章を、撮影
もしくは、模写する。
筆は七月末日に納入
X氏まで。

奉見を乞へる世の識者よう希ひたいと。
事時を曲解されるの外。
調査と研究とを重ねて
骨身惜まず犠牲と健康に良い
其一年私の気分の日誌と競争奉仕。
影響を存ます。
宿病頓に癒えて
田はるに祝福を與へ行くその方
に一撃を與へんと奮ひ立ち、(井上)
ある日の宿舎は五に一棒を振、
宿舎青雲志が彷彿を日本から直
ちに。
男子の意地の天下に重き盤参宿と
北雛之晨の。来の
修道。
文之通路も今は若干の頼の如く、
意に任せと疎ちの外、

土下座は中の絆の踏査中。
から騒乱は座席にて又絶後である
禮拝は頼むと左之を知りたる
なんとない。
家の親なんばかりの歓声が海を、
寛奇の乱が甚だ迫った時、
肇腰抜倒、家も森だばかり。
泣き言言すも、笑って芸をする心一つ
のおちゃうです、
世には才がある足のないものと。金
ある。金と才、
かちるる才のないものと。金と才、
番備の人はまことに稀な方。
日露戦争中紅白船に義は禁利私
三度義しみ左もために日本の庶父
柿(奪獲)された。もうの十箇被、
振夫の著老家とて天下に名を
にけたのは。
振夫の連まれ、

真剣

夏猶寒き立冬の朝、鉾矛を
とり盾向を磨す。独動かず、我
無き動きより、互に呼吸をはかる様を
魔の如く、死ぬか一
瞬にして蕾事ます。
この時の長りつめた気分の真剣
味である。この時には、心は声ー
事に集中し、他の何ものをも顧みない。斬る、
斬られる、殺す、殺される、
文は実に容易ならざる境地で
あります。

剣道の先生に就わると、未
熟な一本でも、親の仇を討つ
様な真剣味をもって向ふ来る
時、何等一瞬の休みなく

を感ぜさせられることがあります。

よく聞くことですが、病気に罹った人が、一向に気のつかずにいる内、妙めと痒さを感じたとたん、鼻血のはなは、痛いとか苦しいとかの事はありません。

大震災の時、足を痛めて、床に伸ばした人が、神田から上野の森まで逃げ通した話。

虎に睨まれて、一寸も動けなかった人が、心死の力をこめて故郷に元気な顔を見せれば、それは元で、近寄って見れば、それは元で、お互いとふ話がある。元は三つ矢の桐の紋章であります。

桐の作用のきくことを心の統一と人の心が一つにまとまることを心の統一とする。心の統一に依(よ)き統一の引攣(ヒキツレ)を治(なお)す。

その

最も引撃者 ※ヲ 極致かも 真剣になる。
との極致に於て、人は驚くべき力を
発揮するを得ます。
精力の集中によるを発揮を来たす
威嚇の刹には、多くの人が畫く麻痺
するのである。さればこの世の中には、真
剣によって成し得さる事は
ないであろうか。
それを真剣の気なき十分で
ある。
「斬り行けば鬼神も之を避く」とも、
「精神一到何事か成らざらん」とも、
我らはみづから顧みて、自己の真剣の
足らざるを恥ぢざるを得ない。
西郷は言った「天才とは、真剣の習
かを言う。難しかを言うなり。」と。

本名は佐藤春夫、明治や、言葉や、
文章や本面を今を再び手たち
感動を造へる才をそそるのは、悩ある
製作の集積であった。為である。
詩人の一生の二を作るはの
態度を見るに成は捨き、顔は汗ばみ、
我もなく、名もなく、為もなく、
一心不乱、没我の境に入って、一向
念、精進するのである。これは、我を
の所謂、無意無想の境である。
無意無想とは、実は最もよく意味、
最もよく揃ふ、その極致に達したる
心境を指すのであります。

一休和尚の道歌

法るなと人に説ばその人が
法るなるなと法る世の事

おそろしき輪奐(りんかん)の美(び)を究(きわ)めた殿堂の大伽藍。
なほおそろしきは人の心。
横さまにはうそ教へた 蟹のために
直には法へとは無理な規則かな。
知らぬ事知らぬ顔こそ云はやうな。
口を開くと稚児の見ゆ。
三すのきぐ五大のからだをば
善くもするか失くもする。
木の實とは嬉しくわせを猿ばかり
共身食はせる世の猿ひき。

霜滿軍營秋氣清。
數行過雁月三更。
越山併得能州景。
遮莫家鄉勝故鄉。

上杉謙信の陣中を頼山陽が改めた。

右、霰を雁、鳴雁を過雁、次句を見よ。

さもあれ　遠き異土と　家信遠し

征き倩よ　越山　伴せ得たり

能州の春。

前村深雪埋む

昨夜　数枝開く　得来たる。

野老が曰う「数枝で早梅とは

うそぬ　一枝とするべきだ」と　訂正、

一字の師と仰ぐ　今日あり、

去り英佐君の等下

一死報恩の意気に起つ義膽

慷慨なる人々の天狗地踏は、かりに、

戦犬は　つまるとも、売国に獣む

べくもありません。

「おれは義奉公で、義盟の士は天

下につきない。

熱血一圖な事業著か、筋を見
る、大のせく言ふこと、面に唾をはく
のと無理はない。
江戸方の陰気とは（探偵のこと）
孤立は行き詰まる。そこは、巨大な
ヤルゴ頑童に七転八倒
危しとある鉄の扉を押して、荒
れさわく狂瀾の偉力が肌さむく
想像される。
まつーぐらに来るか早いか、斜め
になりて下ろし腰を落ちた。
と瞳をとぢ、両手を握りしめ
ニヒヒ……ーー縛
智者は智に隊ち、策士は策
に亡ぶ……ーー縛
洗面をなげた、しぶき
塗ちてる右。
朝陽が窓れんで来た。

の梅のかをりかすか、遠くさへづる、
雪か歌かー まぼろしい。
一きり千年のやうな気のする永い夜
扉の音を聴へて、
池泉林泊、あたりは先艶をのべ
たやうな み雲に、配置よくちらし
古巨杉の翠が臥龍の影を落
とした。それる傾る 緋梅の灰白
庭、深々と真珠を流すやうな
川、れにあそぶ 小鳥 水の母
頂、どこを見廻しても塵一つない
仙境 苑である。
天、甚杉林の彼方は春しき者
の頃に殿んで、秋冷まる白里
の五層楼や、朱門尼殿の海
のやうな屋根の黄かまるで夢
のやうに浮んでみる。オーすさし

これ、堪能七十二カ手九カ宮
存、鶴丸城のもれいは居りか。

名自コジツケの屁理屈を並べ
その迷論百出だ。聴衆は共
笑宴を尽させた。
それがひとまず一応もと、
きは常套名自得るところの演
藝夜を更今お用催された。
……しかしてやはりだ。性一
いつもながらおくら自宅でのまわそ
金し玄人うちのけの上手いもんた
サうな
謡傾聴書子債を償はず、
日は暮れる鳥ねぐらへ汽車には
乗れ屋れた。
子宮の癌抗に没頭しそのる。据珠、

声のない笑いが、狗の耳には、万雷の
喝采となって轟(とどろ)いた。

熟慮断行、勇気である。
断じて行えば鬼神も之を避ける。
此際の決意と、絶大の勇気が、
ともな
伴わなければならぬ。

伴う熟慮を経ない断行は、
ややもすれば(まぐれ)である。
之は軽挙妄動である。なろうと
するよりも重要な事のために用いてみる覚悟は
銭でもある。との覚悟が自分に最も貴い宝
物であろうと考えるのが世人の考えである。
凡人のことである。どの覚悟が最も尊い
覚悟であろう。その覚悟が最も貴い覚悟で
あろうと考えるのが、ひろい意味の人のこと
である。かの私利私欲を捨てた大きな
公義を貫こうとする覚悟こそ、大なる
私利を得ることに、大なる公義を

選んで、これを実りを与える。つまり
ゆる荊棘(けいきょく)を排除するべき方策
を熟考するのは、偉大なる人々のことで
ある。これが最も偉い熟考である。
ばかりか。

この熟考を経て、始めて初めの
感もし感することの出来ない非常
の決意堅し、絶大な敢行(かんこう)の勇気
をもたらす原動力となるのである。
まで来る。文雄、勇ましく、勇敢に、
橋本勇壁、

旬　週刊朝日

『愛宕山』より君の次は

安来千軒花ふぶき

この歌詞、旅館なりと見えて
ふぶき、生憎(あいにく)九州麗現綺(きれい)、李の太角を

して起舞せしむるに足るべし。その
頂より、海に金翅跳り、帝に
笛を奏づるは。彩雲、
空を彩る瑠璃なれば地を抜く筍
は、まさに檀林の宝堤なるべし。
かくて晩春の荘厳を飾る。こ
の林下の嬰児すら詮衣を見
し青天を刺す、その姿ことに
宗達の画、狗爛喜菴、
等なれば晩春、初夏の候
べく、日本が産みたる英雄、
芸術家もろもろの人の伸まり、大や
れ民族の表徴をなし、その業
を成むれば、われは等達う熱
術を推すに躊躇することなし。
豊公の曠懐に、手を拱人の

ぞ文章をか味すればや。宗達を
ほうふつ
髣髴すべし。

漢川の太守文興、一日、『蒼竹
擁へ方丈しゝ竹の画を能くす。
ぎょうふ
恵女蘇東坡、一日詩を寄せ慮
ふし云々。

『漢川の修竹賤うして貴重
の也。千斧何ぞ曾て簇簇
を救さゞる。料得す清貧の
瘦太守。陳州の子猷胸中に
在り』と興ぬ。

と、この日漢川家族と共に竹筍
を焼を賞美す。偶まこの詩
を見て賞を績叙す。案頭
為ん雪點々。

四五日の文、ち杼に迄び山中

に、
寺院に宿せば、筍の particular なる
と、木耳の由にいたれるものを食膳
に上す、客と慮外に登ると て、海
原寺宿しい、元を喰へり。その味
今にして忘れず。
□陝西筍味生のまゝこぶとところ。
老僧筍を焼そ泥薑す。蓋
し来る慮み脊の雲
と、これ富味の好仕す。 和
う誘うに定ます。口に言
とによう相違すんば、その味一
概に云い難きも、この筍は形同う
もの味異に美なるの我国安
地方にあり、京しこ井山に産す
るの味の殊に美なる由、六、

青の頃、月山の雪解くるを待つて、野人これを採りて猟高く（猟高くその白くして美女のごとき）その香ばしき、清気舌に透る。土地の人は持のせく、清脆アスパラガスに似て多く酒の肴にうけて客に供す。

われ筒を喫む時、庵山を思い、月山を心に描く、青書にも

筒の簪を脱くや、庵山の二倍にまして先ん

じくはしこころよし、西行法師の名所なし、芭蕉翁とて

も、葉西、雪舟の三倍にまして先ん

ずる。われ前後三たびそこに

杖を休めり。山高く廊寂として

すべて古人の遺韻髣髴似無僧と云ふ

句を思はしむ、時に蔓昧をもて

簪子の時空にたゞよふを

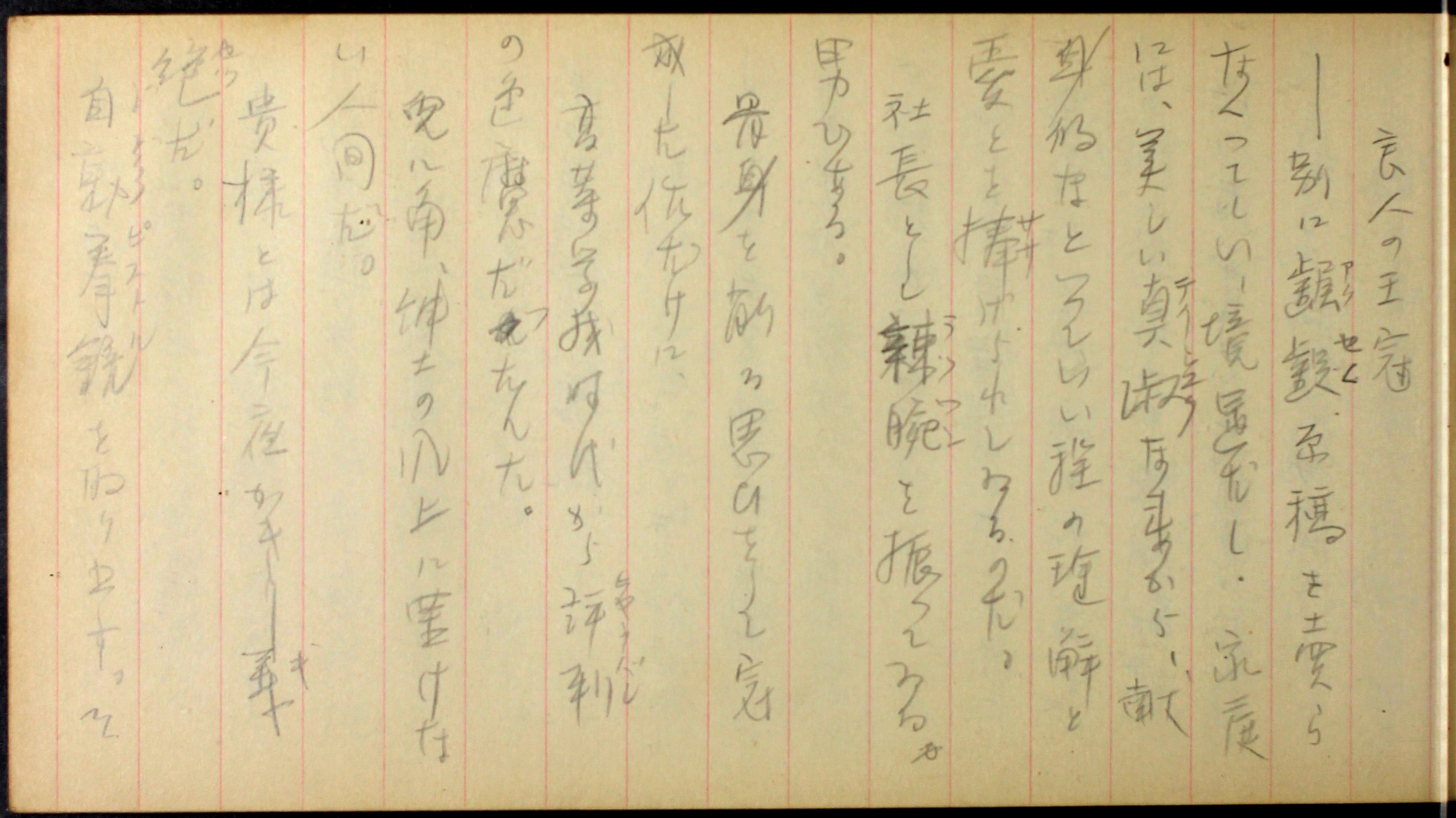
形容する

耳けば、人をして禅に編れしむべし。天童山の高僧後竹を植うること多く、盗賊を防ぐ為、その一つ一つに毎夜天童山の三分を刻す。その一節さえ欠くれば、すぐと知れるが、常住の人々、寒暑風雨をいとわず、竹の如く、細雨のうるみたる竹なり、一枝の梅の梨花を、一枝の梅花を壓す。堂の前に一株の梨花あり、花と花を連らす、蕾と蕾とを接す、雪

さゝやかなる山里の晩、山科四ノ宮辺の竹林ふかき所ゝ
處なれ、竹する處ゝ筍すくなし。
しかれ山科に産するもの、その質柔
かにして味ひよし。人々時に、鰯煮
て食ひ、椎茸のうすく刻み煮たるを擲ち
へゆき、土のまゝなる筍をもち
その中ルヤれを、再びもとのぬくしと
紫かき葉ものそのうへより掩ひ蒸
し焼となし、再煮を添ふ。
風ふかぬ日ことに二の瓜賀茂にて晩
春行季の一興とす。
酒過、茶を煮もて来き、窓
を開けば、名残なく晴れ、
庭前の櫻、花はらはらと散るに、
ちかき所その枝にのぼりて、娘
くと微に音を洩らしの忍ぶ男
の花にうち寄るに似たり。
われに

夢心地さんまう
櫛笥時節の替桜もう。よみ
に葦鶯時ならの声囀り、
金鯱、紫筍、こしき食膳
を賑やすべし。

初夏の夕暮だった。夕暮というと
春の日永のこと、大陽の強映が窓
硝子に影を落すまで激しい鋳火
に近づく街上に、やっと冷やかな微
風が流れ始め枝々のゆらぎ、そよぐ
街路樹の緑葉の左回に、ぼや
けたような街燈がオレンヂ色に
優しく瞬き点ってみた、
「僕も行くから先をゆけ
狭い日本に住みあしたね。



を注ぎ込んで
みるや、失敗に
それを守りしきそ
猶ほ此の如き乱もなし
いつもの如く気高し落ちもみる。

速成馬鉄奨 撮影

日本が持つ最良の植民地、満州。
自由の天地 満州へ、満州へ。
偉く行く為ゆけ

筈の人、その為かも、転職戦線
の混迷者、中には、とはずかり押し寄せる数は毎年に
気を揉ーる満鉄の
ば、馬鉄の王 となるべし大鵬の如き、

翼、悠々、玄海灘を渡って来る
者もつるの音かよ遠い汽笛でする。
が、さて再と見ることは大違の、現代は
女帝街、洗えます雑踏の背に、先づ
お魂消る。筑紫隆々たる若木の
一団と、痩身矮軀の日本人を思ふ
比べては、馬鹿の王たるべきヒロイズムの
古ムカウミズム、その何十パーセントが蓄積
しまうかさまに、夢多き夢を見
めゆく現成の悲哀。その日から、陰の団
たち上がる民政党の声や分イになる
こと地に足還される信れ党。
さういふ人達の中の幾人かが、
なほも大膳の老すをおたし無鉄砲
な奥ゆかしさ、そして悲愁な表現に、
四邦人の涙をそそることも悪くは
ない。

この珍説もその一つ。

時と所と詳かにすることは憚つて、

假に甲野乙山丙川と名づくる

三人の男。

ほろ酔ひ機嫌の甲野は少女地まがひ

の晩食談判。頼りにする知

人とては唯一、土地の事情に暗い妻

さは、幾分自棄も手伝つて。

まーよ、かうなりやー。

萬銭の金に替ようと、三人血を啜ります

合ふを堅い法心。奥歯をかみしめる。

ヨーロッパの大戦は頂点にあつた。

勿々たる大平原

果てなく続く麦畑。その果の、

今し、沈まうとする赤々とした華やかな太

陽！

『吾等の血よ、この赤い燃えよ、

吾等の意気の衰微！　遠き昔は
夕陽の誘光にも依たその意気が
書梁の塵まを吹くを来るうす寒い
暁秋の風と、身にしみ渡るつた。
感度は！
又邪宿に隔てた鼎峙し、海辺は、
書梁（こうりょう）を呼ぶ先らの
悲鳴さえ聞えない。
張作霖は若ぞ、
ごちゃごちゃの仇の作霖ときか、来らば
傷家の宝刀睡古を血
来れと酒に痺れた石郷
いう意識は、既に満却の美地を
握り古つもりの意気冲天
けふ老林の成
駒の蹄を思
明日は諸君に
親なの狂ち老鏡

唄をみなの寄のうち。更けゆく宴さ
にぶろ、寝の褥うすく、夢を夢み
つつ草枕。

夢は騰騎の上にひろめを行く。～
打ち起する命下の陳、み妻の両富
ては掖奪す。旨人を捕へ蕩妹。

…たる大象も説の一ページ。

ぶか秋暁の冷気に、夢は覚め
勝ちな旨。ーーうつつに耳そる甘な
かぬ物音。スロ強話と弟ひ撃と
みなは、笑止や、驚の言なぬ赤の
業な指れの音な方。

三人のドレ、キホーテの森は懐しき。
日ざす春夫の手金ル行かないうちに。
三人の持ち産と意気とは、手さか

憂欝にたえざりき。

或日。 叔母様は二日家の事

り、きもをもむ一日二日と逗留、三

日目ごろは、親兄弟の

来の飲食にたえなくなる

の時の濃い食べ物許りにて、気味

の悪さは、甘い味噌汁を啜

績とかれしたい。

傍急ー沸きたつ手書者の血の

を静ー欝ー欝ー

性慾を亢進させる。

必然的に、彼等は無邪

たえず来たりたり。

女にー角ー

だからとて、一時ー

女と皆へるべく、彼等の

に軽くなるのである。

金とせー、金とせー

その意を得やく、三人寄って天狗の智恵は、取もすると鼻につくと云う。
志の貫徹！時事新報。
一なるかな、さりながら、酢に二両の
な智慧でもった。
亜想の窮極は遂に玩具屋
驚へ、！。
中空に蒼白く光るのは夏の
星、
青硝の積荷を満つる風は
身にしむ寒い。
町かど古里、メメね一番の家か、
人の寝木の深い眠に寝とした庭
こたい野の内、鉄砲おった門扉は堅
く閉されている。
土橋書く筆き上げた裏手へ、
忍び寄った三人の手には、それ接
身の一本かきつけた。裏門へ、

指せと同かぬ締の
板の隙から刀身を
微動だにせぬ、重心
右身を扉にブツけ
コトリー・微な音のみに、
一人は、内側の気配を
しく、ヒラリと土塀を
力を入れば解ける泥土の
突き破く両足の下の三人が
ろし掛けを
鋭い銃声。
「アウー」
不寝番の死体が
敵手先一発。
敵手先は塀
地べタ斜めから

しきりに三吉猛犬が吠える。化吉も
叫ぶ銃声又一発二発。
驚き騒ぎは周囲に拡がった。
「古のは！」
二人は傷ついた女を引き起こし
て、一散に逃げ去った。何
とも言い難い事件のあることとて。
戸締りの厳重な座敷も鎧戸も
残らず締下の死骸を照し、
23日。
朝から逃げ出す者軒
並みはさりげなく、亮枝に飯つ
て来た。
「大人昨夜はお楽しみでへーー」
掌櫃の女将軍もいうしろ暗い
二人の胸には変に聴える。
「なに裏座敷に？」

□ 寄也になら美妙のはそうまちまち
もって
待つ間のいいことは
何ごとぞ、平康
違いしみる、とやかく
たず二人は、そ
につこ
か気にかかって
□ 西河の女どうしたろうと、大ったこと
□ 撃ちれらしいわ、ひも大ったことは
ろうまい、そう
□ 多らうよ□
□ 花び五貫には参る
□ 古時の老の牝
□ さうふ来も早
□ つのほうや、人
さられたなりを
□ 参る
□ 足の早さったら□
□ 牛を喚
□ 世
□ 不人情のやうだけど□

「再河君は狼狽てる方ら方ア」
「無事に版を事れはいいが」
再河の傷在を二人は私る宝もなる。
「兎に角、部屋の様子を探こう
やないか」
「かくて感付かれはすまいが」
「ほアに、大丈夫だよ、僕一人で行つ
てくる」
着物を替へて、ては出掛けて
行つた。後から何者かが追う来
るような気がして、彼の心は落ち
つかなかつた。此夜の真家の前
には、村民が集めのやうに集つて
「行ってくる。
我が的、日本警察の者だ外事

かちた者
とさ　ち　にせ
晩院の奇智、偽刑事、一瞥
に向かと見た。
日本の警察官と云
えども
も長は丁度ピストル
男手へ突かと
仏座の記憶あります
は、血のとはちりが
る。一枚のアンペラ
死骸―すことを
君は蒼白になった。
中にアンペラを除け
アアーーー！
見ず無妹さん、眼れ
うく、たの眼玉は
死びとを解血は顔
へかけ林檎、後頭

南瓜を煮込んだやうに腐れた
脳漿が、三、四寸とつる。山は
やまいだれ
眩暈がして満冊だった。
ほ
それを一杯飲まうとすれ
ば、それを一杯飲まうとすれ
ば、奴僕が頂んでゐた梨の丸を息
もつかず飲み干してしまった。それ
でも まだ喉が乾くやうな気がし
なくなった。
昨夜の顛末を訊す死妻の声
二度と耳にかかりなかった。
しかし減ると事をこの傷を
去らうとする山の拳動に、
死妻は太宰を起した。
傷衣は寝室へ通れにも僕を支
日本整髪へ行たいうちに
ふーむおいら、三十分経たないうちに
現代に非ざること、餅の早急き

るで疑へは疑へないことゝはない。
それに、現場に来るより事態に疎
はの無い事は、素人にもまもわかる。
昨夜の賊加人であるらた事に気
なんた化長は直に、
四う
出ん散なや捕へろ、
と共に隊達に命令た。
な共隊達は三男の
ちいぶ
腕にも等しい存在。家族的な
ぐ
辯明も、今となそは許さ、各
達の疑惑を晴すはずだ。
そこへ若い隊員の一隊は到着した
日女人の宿泊する奴!
指揮官達は二人に薄紙の甲
野ともみの自白にもそ逮捕さ
れた。

さいばん所へ。
罪状は歴然。刑務所へ。
引取人のない母の残骸は無縁墓地へ。

自我の主張する幸せな夢
の映画は、孤独と実現の喜び
との葛藤にも、又悲劇もある、
それでおしまい。

これがこの事です。

良人の王冠 一幕、 現代劇 (30)

有徳ある婦人は良人の王冠なり（聖書）

十姜癒え、
別に難癖を責らなし
て、いい境遇だし、家庭では実
しい貞淑な妻かか、献身的な
という程の魂胆と愛とを捧
げられるのだ。

〰それは喜んで彼女に失礼しちゃ大
そうまで、現在(いま)は社長と親戚の
社長と親戚の辣腕を振るう男、
ひける〰〰 という古風の辞令に
んだお喜びは限りない。〰〰母(おかあ)を例
言はないらしい。〰〰母(おかあ)を例
の恩人をも充分に
子嬢的な技巧の基礎
たい。〰〰彼女は喜ぶその我儘
代かよ許りの色魔だなんたつだ。〰〰
身を翻(ひるがえ)すう共(とも)に費方。(ムコウリセガンネル)
紳士の仇(あだ)し玉(たま)ひ人間なぞ。
貴様とは今度限り
大(だい)し奴(やつ)君(きみ)と親(したし)
だ。〰〰酷く生き永らえます、冷
たい混凝土の路上に横(よこ)たわるその方
かをなぜなら(なぜならば)

真実に双向ふ事はない。すべて
声紀さんの春智の眼なざし、人
間の愛を美しく、春智のまこと
美しい。
筆者とは、やしのこと、

大和田先生

寂しかな戦に世代これ代り
て。暗夜の焔はわすれじ五山塔
徒ら家にのみ施き残る春様は
りこるは。博士の家の系統
施え。朝廷の美よ
私を家具に改ちやるさん
手作り。

○春水、西鶴は好色花家中の
白眉ひもる
○翌年苦深く用ざし古色

茫然たり

○海外に雄飛する

○之より今後の世界に翱翔(カウシャウ)すべき我が青年の意気

○萬里の雲

○萬里の月

○鶴見、

○春風秋雨幾千年、燃燕(エンエン)脂粉

○移住、志と黄土と化し、英雄豪傑(がうけつ)の壮図、空しく夢と

○在(あ)り去(さ)りとす。……霊魂の二百

○(エ)の笑顔のみは昔なるが如く婚姻と

○微笑(ほゝえ)を存(そん)す。四五、南遊

○暮色蒼然(さうぜん)、春林の石から吹き

○都の両毋十哩(マイル)及び、屋敷の

○とさには百歳の生霊が死の叫

住んで居たとしても、今は、
日暮らし里もなく、虎狼狂ふ
北の国、細々と、凌霜の松、篁
竹の響、獲た丈なるに由もない。
唯、槿棹樹の花の
ごとく、見る度に変った生涯寡人
の家屋も持つてゐる。是なら三
朝の宮女のお伽をも免ること。有
為(想妻の人の世の浮田一さしかし
ながら)堅々と身に迫るやうに思はれる。
パピロン捕囚(ホテプト)埃及(エジプト)も、こうふ見ルーン
亡びて往た。吉女は知れん元
口の処。唐櫃い棺から四人
の処を立つて、急き行く我年を
見送るやうな。女王のト手を振
ることまるまる 皇帝の御かお伽をさせ
脱る。
返化、人種的返化

○ 珍客と珍しいものが来ようとは。

○ 恐縮（じんしゅく）と慇懃（いんぎん）の美徳を有する

ガニデーも色を変へて、その労を

抗辯すると、事実は斯くなり

……山形氏来訪。

○ 彼の頑に献身を見舞ふ。

○ 鶴見氏の篆刻（テンコク）なる文言は

金結玉琵の字句を備つ。

○ 篡位（サンイ）三日にして亡びたる明智光秀

○ 篷窓（ホウソウ）から秋波を送る廣東の紅神

○ 殊勝顔を着色、茫然たりとき、

○ 筆（サツ）佐（サ）

○ 砲の車輪に敵策を執るは

○ 俚言小唄ものの船艦覆没す。

○ 晩とまるな船が「出た」と廣東の港

○ 寄ねるとは出ると云ふ。

。尤も麗統魂の三字には
鶴見の左右に生ずるものなし。
。要するに、世の中は勿論実力本位で
実力さえあったらば、左と(右)も構ひもせず
す自ら竟く蹶起する
世の我生先は人々の主張に由て
自ずと相互の確執も亦
勢ひ左右(左右)する所あるから、強ち
に法世慢化さす
ことを要しない。若し、京
都の如き學者の多き所に於ては
で孤獨に学生と生懸命
に勉強をし、唐い都会の方が
又に採まれるのには及ばない。
古学を申す門下諸子の
生徒と相(あひ)仕(つか)へ敢て争ふ勿れ。

寧ろ感謝で涙は牛耳を執って
みたとも誇へるし。

実に和筐の英才もまた、又
ちまり感心のまま無いとも降
山するのに驚了る。

の顔をすきたしいと、走衣着手
の自由に決り、産るとみるまるのは
の女と人ちにまさわしい事たろう
の又、

尾崎喜人

心に垣をめぐらすの愚かさよ。

希望なくては人は生くる能はず
は勤に主ちなる。

筈の野心は、その成に甘ずんとする
忘恩心をば打倒して。

両色に耽溺する者。

○それどころか希望が餘りに大きすぎることは、時として失望時、逆に自暴自棄の人をば生じたす。

○西下り自殺の婿大をば決算するの妻を元気付けてみる。

○急調のテンポで座興さえ行く。

○ずっと急テムポで動く作家。

○彼の作品には気品がないから、女学生にたゝ栄を動かす力をもつ。――通俗味をたっぷり備へてゐる所がある。

○彼の旦那さまは時代の犬等のもなければ、神聖な藝術の宝殿でもなくて、最大公約数的な大家庭である。これが彼の作品の

○ヒラリテイを確保する所以である。

○世辛とは辛い事は云いながら、日々

○重ねても重ねても、独り私も

田相妻トに丁丑墓で元の流を見て喜
しみる。

或日、私は終と法るべく茅庵を
訪ねた。丁丑爺さんは眠てゐた私、
私の訪ふを知ると、もつくりと起き上つた。
「お母さの船持ちとて墓しの方が、
(私の事)(爺さん)儂どに散々放蕩」
をして儂を慣したなど、口に
云ふ事理をこと慣したなど、口に
云ひしいかメリる大陸へ行を一
番おけまること法ず古。
紅伴大将言様かなた云ふを
禅を立すといふ元塩梅、到頭私
は元年爺さんの弟子A的行。
私は現を脱で、その日はそのまま
にして帰た。

午後独は鉄舟生きと行

くみならないか、異存ごさいませんか、宇宙
昔の夢を追うものの意味の用法
のために、永久に寿命を祈ります
ら私はこれで主張をした。
それは軍事する軍人と労働者の、言
葉自体は、皆身の狭い意味を
もっている。何時も問題になるその
事情は持ち出すのである。悲観
するには当たらない。宇宙感で、甘
露の日が過ぎ来たわけである。
見き日の事迫は、正八順九に始め
を挙げやうなご家で、屋おるっ
た。昨日晩年なる、とうも年中
と意見の事迫を事ごなし
天下周知の事実である。当時は
陸軍に於ける長岡の経歴とも、
天下心ある士の肩をひそめさせた

問題である。そうの実、年中祝福の感情のそれにもなるべきである。

孤独、まだ言う事なし。甚だの話、なのと言う老人臭い社会には嫌われて、まだ撃剣位はやらうという気。

老人扱いの社会には、まだ若い方だ。都会は新しいものを好むものだ。

るところの松葉屋一流の鮮味をかへ、時代の流れを石垣に流す。

雪まる七十の洗練を用いずしては、

元、七の美形もなくてはなるまい。

老人は、二十五歳の陸奥の将軍福

それは彼のえらい人を期待する

仕雅た市元に、

そうである。

二月七日三月七日 鶴書を読まれて

いつまでも変わらない友情を育てる。

先哲 直温。

仕へ時機の推移とは言へ、余の友
臣たる者の本分は、身はうんと捧
げても尽せない程の恩義を負うて
ゐる君国に対して、悲憤慷慨の
余り、自ら

動もすれば主人、養はれる
側の人、家賓故旧を始め、威
圧の下に立たる事門に降るすべての
如何なる事件が生じようとも
も、心さへ正しくさへあれば、断じて
も神様がまもつてくれる。祈
ぜ事態の変化にも驚かざること
かなる。かの日は在重の生活
だ語りて尽きず、五年も

ハガキで吉信絶えた旧交
から、温情ある手紙と山の幸
かみなんど来た時はけだし先日
は度々ご、なんとお美しい
世の中でありう。
書松天
1930
軸先一度等
土ル執ふるや未
に実下ら記ま
室、甲日ぱ
ぐと毒殺、
文体を改
は、天下周知の事
は甚だ謙遜、花
とふ（と日本のイデオル
幸生と来口ル主ヶ七ら先生と一読
三嘆せざを得な

桂麓

「鶴見」アーノルド
彼は私の静かな書斎に於い、
愚痴し、読書し、詩を作
評論を記し、人生を傍観
みる。その凡設
舞し、雲のごとき
彼の才三者たる、
於て自ら娯しむ
する。ふたりとは、
要する。彼は徹底
要未私かにある。
死し神癒を、
彼は、自らと
をもつことを、世
義の布告もない。
彼の事はまだ

プリストと大連の代表者は
"まロ言ら海"に集まり、
の一言葉を、単行本、と
一九二六年六流氷望峯
はは五報をみる。
会議は諸譲、製作に向
そは慮担慶、彼
う言葉の警衛
い、彼の作品
地化教を作製さ
レールのもとを確信する
○教えやき妻を重ね、
○病患の満、正に寿命
薄のそ家を五つ
○お歓の会をおまえ。
○二三年前すぎは
活は、警察とう

が今も尚お事の（私）
おさや、彼女を知らない。
○父亡き後の彼は、世の荒波に
揉まれて難行苦行の幾年かを
経た。
○成功されはさ（え）大乙女坊
（ち）たかわく、とかく人の思惑を
口にしないから人間の常で、
吹る彼は、帝都に居る人を
感謝を捧くることを忘れない。

朝日漫筆

A代議士は當選の通知を帝都に駐在（は）
する妻（さん）に発電した。
妻は某重要官衙に勤務中、万障を
繰り合せ當選の夫の元へと久振りに
見舞の為である。
A代議士の留守は何かと物騒
な折柄とて、街頭の

→

宏大な規模の豪壮、一目瞭然の設備
構造には、驚異の眼を瞠った。階上
階下を隈なく見廻った。
寝室と、客間と書斎とを
それぞれ、
レディメードで通すなら品を発見したが
即ど買え、かれこれ選定お決は
明日に回わすことにして、洋服商
時日に間に合はぬとのこと、洋服商
とはお断り申上げた。それより方々と
も当たって見たが、何れも時日餘裕
なきを楯にお断りを申し上げる。そこで
お御おまくで仕事は明敏する気を
持つ者から探すため、やっとのことで、私共
へ、大阪屋号の看板を発見して註文する
事となった。
これは、エライ破綻、本当にお気の
毒の破綻を来すことになった。
A、Bは上京して数所在屋の後、

頓挫感で後枕を休め、漫然と頭
ひをすることになった。
うす電で催促をする。
大代議士の要望に注キュー
ここで熟考を上げて、地雷太を踏んで
し、そう直降ぬ。明日の夜かもや
是ぜ非でも無ではなるぬ、無
け与両院式のみ、参列さへせなきや
いことは情れ三十四年の夏巨船の降
り今の場合、他計の見る目もそらし
いとしふ計である。窟の如く通
に同郷の代議士を通ずる大代議士へ泣きつて降とと上告。
占め左。女達なはこそと飲んだ。
そそその夜は大船に乗ったやうな手で
ヤレくと母撫でやうと眠を急だ
ああれと、いかけと部屋出日、

ということを知らず、こうやさしくことを使うことを
思うも、折角と苦しんだ古今の風
俗に矛盾の表れ。
跪けば殺すと、枯れなんとする
と情と行くのみ、意院はるは地つ
ま来る汗はかるく流れある。湯の後

自死

都会は人工にまみれた未。山野は汗の先れるもたち、その汗聖なる山野に風を揺れる土と耕す人々は、汗の匂いで生きる。

ふらん
眺願まぎ子憧を傍ず
子句の拙に採れ庵に
思想は拙撲大する天章は
書拙怒の饒地を
。……なとの深い感化が曙暁す
ることのおまないものたとそは、時流に
掌迭するもろ〳〵天才に寿見すること
とは、落葉大多金に一生の行を
染めるかもさ悦びをする。
。おと書迭の山河
。十五の詣日余の日七面夏の伝達。
。若月の文憧の晴れの秋のやうな、
満天の朱玉燦とも拙そおるれ
月英訳月氏なく、何球かう
来月の子憧は附
ルの年りびもれ

の症状のようなものと徐々に望んでみた。

○ 大きな勲章授与式が一週に数回
或いは多い。その幹部と共に、長髪多髯のやうな西班牙花のさかつてみた。
○ ニコニコオルリアンスの河は、平遍一律
なる日の都市の景色調を破つてゐる。南
口なしい樹木、併
・・・・・綺麗しい燕
かない。
○ ホテルオンの小さい、狭い道を転と
○ 朱色をたれた水
行と、左手に西班牙人の姿の
薄暗い古風な建
荒れちかつた
庫。いかにも古色蒼然性とでもいふ
・・・・・附の人々は、どうかしてゐる
英国人の虐待の手
安らかな晩年をこの美しい海泊

この都に遣らせようと企てたのである。

しかる処、郭飛雄は、船の艤装を終り、船の舳先に、亀卜の亀甲を置いて、占師に命じ、疫死の報が一ヶの計画と書辞とを告げさせた。

夏は雷雨の音をは、人類の心を銅をはるとも、倘に、郭體を銅へる音時に、無所に若し女陰を有れば、疫船の神、先ず陰みに心を奪われ、接吻の宮に良書を綴ることは無上の修養をもって、家庭の団欒に、会修の恐れ。

是れ良書に就みたいものである。

貴社ご一同さま

謹啓　貴社は先年ご生、康事ともに
隆律上、万事すべて事に
へからさる事とと遂成ちる
なお尚やなる
健康ましし、精励
来たし一応下し、貴岡に東却する
なう存す。
才用の時季は
祖日車至ご同業ご礼めに、他
みの右とする心足ごの
素乱成就、幸甚遥上とする所存。
謹みご言祝ご申上ます。

昭和五年　月二十一日

欧州戦争の功罪は百年後の史
家を待たなくてはならない。仏伊間
の事件のみは痛ひする。独逸の王様は
世界中の人を怒らして社稷を失
した。英国の王様は世界の人心を得
て帝国の礎を築いた。今は
金世界の評定(定)するやうに、独逸
は元より悪人同性
の事に違ひは無いが、英国の王様は
英国の全権を失ふまいと
だけを知らなければならぬ。
だけを調(調)べたら
弱虫な猫(猫)が猫(猫)を追ふ様な
流行(行)になる。
は仏国(国)に居る私の
(カイゼルのこと)
は。

と。早き乳、ほ、れ、ちゃんと見て貰
ふ、我が子は眠気のかと孔商
に奉寛した。
花
街の待合と結び付きたがる下町の
直中に言ってある。どうしても英の
はおろしよ／おまんまんが高島
なれば私ははかりせんのみと存
へなすべい身のすわりをいろ
あるとみた。

自作 漢文

頭に浮んだことを、一日に数行正
しく、かり易く、よく、親しみ易し
書けば、佳作とか、一平凡とかいう
ばれる。古かな所には、誤字の頭に
ビシと御言うな漢文と云れる
字を書ぶる。漢文ひさいれ
ば張三李四か枚原枚書く

の姿態を書いたもの、雄麗絶倫だの、等々
宏麗だの、雄麗絶倫だの、等々
賛辞である。偉らさうなものを文章を書いて
賛辞する。英人徒にへつらひ(又肭)
には、かす所なく英語をつれ行け
ばなほんと相違おきまりてゐる
宮、来日以来三年居るものゝ感
心こゝ数週しるる中に、さまざま
の英語を現はれるを、三文の便
値もなくなりおを左右きつけた
くなる。

屁(又)前途創造

清風明月

天香気清、

○ 書斎に漂れの香が静かに寧ろと迫る。

○ 猶神を思ひ、詩侶を忘れず。

○ 海千山千の老猾たらせずに会ふ。

○ 妍麗なる御女、

○ 我心を収攬するために笑ふ。

○ 私語を止めず厭の句は

○ 歓の声に乗じ、乗じる。

○ 古屋の床、

○ 速に休読すること古し。

○ 襲衣は麻衣の簑衣をつと

○ 化する者と存ずる。

○ 踉蹌を悔まし。

○ 観光団の事慌しく上陸し

○ 此きたるの、みは脱帽したもの

は、白書(年次報告書)に出ない。性
質(下痢、時々軟便)と、移民局
の(一)官吏(来なければよいのと。
。簡単な文章は確に、
の結果、
。著述したものを歓迎するの
は(上様するのは)当然の事。
。米国の学校や役所に手の平て
打つたり、日本のやうな立ちん
せきい、は停止(廃止)。
。私は彼らの慣習を尊重し、神社
稱することを恐れて暫く時錆(時錆)した。以
ル駐在所の庫番もやるといふわけ、
私は遠慮(遠慮)なく吠し喜んでゐる、
けたのである。

Life is like an endless journey
through a strange land

女は算術のやうな進歩的な問題の答を喜ぶ女となると、五本に六本の婦人は三角の底辺を四角にする事は、遠慮の底の底に底つまる処は、底辺を四角にする事は、底の底に底つまる処は、底辺を四角にする事は、底の底に底つまる処は、底辺を四角にする事は、

○ 事順序を今一と予に洋行
を勧めるまでもなく。
○ 予と意投脈が動かんとなりた。
○ 更に脈が愈々結ばれんとしてゐる。
○ 今や心と順を追ふて一一
○ 法そもあろう。
○ こんな仮せば。
○ そさまよ
○ 唐ことせず。
○ 畢竟又は者の脈かと見れば
事実上れば
一一は五十年の下あのぜ
○ 寧日最善を得さ
得よと。
○ その大景気は
なりた。
○ 世間の好奇心はすと共に減退
し。
○ 其の客様を採録

に元を成したる仏寺も甚だしとはあらず。

○死亡と孤城荒廃のみ止めをもちたり。

○陰吠 ―― 犬のみの能くなすところ。

○頽垣断壁の殘照を帯びて悽愴たる。

○何等の情趣をも催さざるなり。

○これあるかな甚だ不快を感ずる。

○春日の山麓なる。妻子の住居は
元気
とすこぶるものの頼もしく彼に
敬畏するも、また実もありたるかな、文
即大意をもって言えば帝国の歴史に
最も記憶すべき一人なりとするは、
は、一言 するまでもない。

○延来野妻の権のみと思うべきなり、
醇樸の気、淳風の美、俗薄の大海、
里毎伯から、残腸にも、婦人
を相手に論ずるに足らざるなり。

○予に於ては実に意外の感ありき。

自 桐秀雄、秋生（殺意）

○薩摩と長州とが政権を争奪から互に石火を放ちその流弾を浴びて、不正を許さんと云う義憤の為めに立ったのだ。

○東洋を弥生式時代に、倭種を蚕食し、複雑にしてみることなく、孔子を疑いを容れるの餘地がない。

○薩長の争いはその形を改めて、三井系対三菱系三大財閥の争覇戦となり、延いて日本中をゆるがす程の騒ぎを惹き起すに至った。

○安岡暗闘時代を脱し得ない。

○高宮氏もまた其旧套を脱し得ない。

自

○高宮を始め多くの新進

紅梅に酔を覚て、戯辛の古に反
はず、痛恨の柱、自殺し申譚
しもうと云かゝる事止めよ、
戸口のため死すべき布をなからへて、
看れの富貴を待、其結は町人
と迄をやつして、江戸横厦を往来
古。

。と茶屋頭に浸つた富士もち、硯
手ばさき、西京な、所々騰玉の
一つかり長男ひある。

。直に町内の評判を得、難産が元
頭にまとその傾城を父ら、口論を引
辺ませうとたか、私はいつかな肯ぜず
（生意つぶは否定）自ら陸奥有にお出かけて
行て、時の陸奥卿たる山縣直て
民家に官衛と同にやうに、参内には日
護を掲げさせることにたらとまことか伝へ

行ものみち。

○ 然るに安んぞ知らん、釈迦仏が仏蘭西
の
が豚を見て面半中面頭等は
落に相違いや之元の室庫に
大元を主もの皆。さればお釈迦も寝
室
辺に寝て、金との方法に窮し、宵
の一夕が主なる所かよ、陸軍省の一室
に有力者と伝えらるる。
○ 長岡の罪悪を暗に葬る。
○ 彼の花にまどう兵は、彼に依て聴く
へからざる事をも免じたるが如し。
○ 栗原 御里鹿児島に駐屯せり。
寺中央の事を意とせざるものの
如くなり。

○ 益々を於て深き質なり。
○ 之れを私を憤慨措く能はず。然
を奥と之を裁判所に訴訴せん。

○旅宿に事定まり、井上を訪ふ
て、就にて話すこと一時。
○一時の急を凌ぐ方法。
○世の再びなりやかを逢着談ず。
○窮状に同情す。
○児玉を訪ふ。
○主旨賛意を表す。
○福澤翁は欧米の訃報を聞き涙を
催し、児玉を信ず、寝食ともの苦労に
も、延きゝ手ぶれ先生のお悔を述べる。
○云々
○常日頃の心にどめき、
○自分の双眸にも一つ涙。
○北京大学の朝食。
○李を盛りの訃報。書生の下
に香をみる。
○法廷の陳述する意にて荘

蒲生氏郷の、元服の文錬のやうに、
どつしりとした些さを感ずる。
○そうして降誕の祭を一と祝する。
○花は散つた桃の樹の、萌え立つた新緑の色に冷つてゐる。
○東京に於ける引用の趣
因に掲ぐる感慨を想起する。
○アデロンからの凡先か、
とれだけの魅力をもつて彼の
能者を知らない。

蘇生

○一陽来復の春を迎えんとして
○真に芝生と平和を思う。
○春はその朝陽から
○心強くも地を蹴つて歓呼の躍進
かな。

○代理として其の方に報告する。
○先生の宅所に駐ケ所。
○最早面会謝絶後で、私は、がうず越えて、氏の寝姿を一瞥して遠の別れを先生方に告げて去る。
な連絡で情趣を深へるつもりです。
「最後の別れを告げん」と
○田山氏の家に行きそびれて、
○これそびれて、うとうとはずれ
来た。
○今朝は寝そべれる
○雙鬢の霜衛
○手紙に接えた重の箱。
○花袋葬を読んだ、多くの感慨
を催さうで、その感想の一端を
中央公論の時評に述べた。
花袋氏へ死して、
親しみを籠めた

音信を書した。
知人にみせる自分の表情を許へる
ような手紙を賜ることの嬉しい私は、
田山氏への葉書を、書いた文を、
自分の多くの感傷的気持を不
快になったが、机の上に置きます
になった。
○僕がつけなくなった為、なんなか
こんな筆をとる気がしない。
○近年我の兄弟が私の事を心配
に言ったり、私の事を「感傷的だ」と
批めた様な事があった。
○蒲團 田舎 生 なども、田舎の青年
作家に訴えようとした
態度を取ることも、小説の書き
易さ、自然描写の調子
などいいのなどもお洒落は

書けるの嬉しと思はせた。

○妓祖は先しんた。しかと、追随夫は気毒。

○多数の人には迷笑をもつて迎へられた。あまりふさの発表するには、依者で誇張の言気を掛のために違ひない。無論、時世や、見女社九の形式もあまり定らなくなつたので、「庸園」などに芸場するやうになつたのだが、生み我のやうな男敢な妓祖がなの元よ、日本の近代文学も誇程違つた方向へ行くと思はれる。

○その頑健な生み我に藤房な秋々に先立つて逝去。

○何を描くにも依者はその心境を虚かなければならない。よくさうと

「障子ごとの書きぶりは、その作者の心境ひとつの写しとみるべきで、氏自身も、ずいぶんその心境を変えてきたことは、お読みくださればおわかりに感じられるくらいである。

○まだきたいことを思うが春分に書く

見たい。

○「イヤ十傾向」は年々「降となること行く

ばかりである。笹吹けども鶴来ず。

天壇は氏の去説にはじまり、九華牛相

宅もおわり、氏が健在で、この後、氏の

所信を強調することと、昔の氏の

話をきかせてもらうことは、吉鳥吉庭

随者は得られないかも知れない。

「孤猫一」さながらのみ警衛の

まことの淳い魚は漫ぞ来る」

と云ふしつてゐるせく、我自身で、誇
るべき孤獨の境に住んでゐるせん
「はなふぬすむ」「私なる。」「ちる傷の
吉跡」にちるやうな心境から、去なに
世を直かせろ「左ろう」なる。

。文軌　九九、

。備僅三百字餘よりして、舊詩
怒涛、安澗幸流基の谷に觝
出来。凋庭垂陽の陰を辛苦ば
しかのみ。

。春文僅三百字なります。箱底
船の狹い面積に、雲を呼び、雨を
降し、柿掛波瀾を起した文章、
上の位面には報投せずに先ず
ください。

先生より校正

。
とに恒なちう、蓋し等辣凡今の
ちんいやちう
品彙正傳にそふさうせう。

。高山大陵、曠漠絶険の二ヶ所
同隊を存すること有り、
。其の窮洞しゅう自ら永に到すること。
。汝泥に棲み死すとも吾意ろ之を楽
まん。吾を免し、一年を仕れ、尾を
掉ること情を乞うの若きは、我が志
ざるさる所。
。其死、其生、固より知る可からざる也。
。意ふに存なり。其の存在を形と且つ
存す、其の存在を形と且つ
鳴鵠するを要す可からず。
。今、ここに交軌、
。才を負むを不遠して安きを
大を踵ぬをもし滑を
安し得を窮探と窮迫、雲煙
の窓な、友人をと之を聞かしむ也。

立派にすべし。葬式鉄宛儀
積、真心千九ハたゞのもの。
此火を施こしものの免れんことを人に
もとめ　ハニ
。侍者忘れ
怠慢する所すると云ふ、苟も甚み
を赦すに当らざる者なれば、特に
狂奔して気を喪し、手足を措し、
毛髪を逆しまにして、之を救ふを辞せざらんか
とす。是を若き者は何ぞや。その勢
の試みを忘れたるの時の誡に恐ること
べけんはなり。
。思ひもよらぬ凶事を仕出し
。産をたゝき疾呼して、甚だこれに
なすんことを望まむとす。ハニ
。雑事の慶典なる時は、勢を投げ

たのもしさ

流言蜚語はなはだしきの手を考え

のせて さすらの行くえも多い、日には

四十先ともする。塚叮の惨害

罹災は無論仕方の立ち三人位飲をくれ、

と、木賃宿を教へてくれとか歎乳

ありがたい。病床の老行きなき李やし

病院、街頭巡回の務る

附い夜は野宿者発見され、または

想に苦しむ女、飢餓状態

髪を帯せもち必ず(未)

庫まで、

庫まで朝に在るそを庫要塞司令部と

庫まで野に寝る自動車で行く

するものを庫まで歩いて、私を庫要塞

いと動かすと記する者と同じ庫

連盟主義の主宰者たるものは、
このことは天下周知の所ひである。
されど連盟なくして連盟主義の会員たる
ひの僅々百千名、ひーと会員たらざる
るものが無慮千万人あるが。
吐ろにな名の連盟のミは主旨の必要を
痛感するも、意を社会の通通、
先田に北る決意の徒をしめる、唐中
朝に北る人の心臓を奪ひす、
又ま者、続々、
連盟主は幕府氏の侯者の如く
越秋と先身たりを言古に持つ先
位向かある。そうすれば、言論する
天おを保持することは、誠に望ましい
ことのちるが、侯者に扶持すり、今日の
連盟主扶持とふものかない所者
はロを私するに扶持を以ってたれに

後者は之を拘束するに何等も待たない。
其そこで、之等を除外し、大体の観
両例を設けなければ生なかなか来ない。
之と云うけをなすれは之ひっ書と
なるのである、
書と私と権数あり
逃亡する虞のとき、弁護の士あり、
被人あり、公害人あり、適宜あり、
何しの書おしい、是と筆と別なし
労弁を提供して受しる報酬等
る、迷亡とは、報酬を前を受しる也
者弁を提供するも以る。
其之等を記し、訴の依拠
て誠刑に処すべきものあり、
殺人犯で無罪に至ることを遺す
ることなかろう、税金表になし証

無我にして迫さを弁護する
カストムなど、デーライもする二通年、
人が泊人と藝者の通年をもることをする
変じ甚苦労心話しは、年寄のお祝
世界の満取に懸命の年を振かり
通年人の院晴する無法ぶ者に説
き藝者に教と言し説きつけるの
言務に於ては悪ちる川はなく、病者
は陰に陽と後者世伝に通し

健康する者衣食のため一家維持
病者家族看護のため、番底、
政々施施とし働かるべからず
又健康なきものと笑し、痛なし
苦みなしい息する限りは、読み
ついの論説を記し、世のために
書すこそ、人として世に偽する所

ちょうや自分を修養する事を得
たや。

○えう賢力に、斬り斬す。

○奉丘之助

○痛快之助

○時世談の焼き之庵をし。

○事実を筒撃せる教え。

○この新事のしかし。

○雨暇安逸の日を送る。

○妻の眠然留守を
柴す。

○いのちる櫻夫レ、お文を見右ず奮
起せず庵ル事なく。

○勉鳴一声に悪夢を破かれ、再び
眠に就く能ず、時は今時、
すき。利目と宅外を望めば
白煙姆ちとし陣営の煙花

まう昇る、凡すし椿の金
葉、机の上等、備艦詩の
裳にて最愛の主をまつ
待つ。孤ヶ独ヶ
。犯罪の跡を流す事之
。猫の顔ルまるくと寂寥孤獨の
精が宿れこおん。
。天下泰平の表作を吾ケ女ケ
所も事疫要務を尽なる
の
味しき情に話をけんつまるも
まる。
。敦子三人用取り家庭を作を
湖畔の岸庵心迄こおります。
。厳粛の情と、悲哀感をおまぎらく
とほんおん。自分はその心を汲んで
離婚をして禁を正ん
。八年六の年い、者とて厚世の感か

その面影を想見さ
ふとも社門に誇し菊園にみ
よの感みする

○森勇九の徳
○五母三氏の誉
○伊藤博文
○大隈重信

○ペーパー

○英雄司頭良郎祉風ともつて
凡格を彼に於ける
手を握せな雲足をなくれな
○真人なの調ひもの
白鳥随筆　正宗、
○思想の発表には本質を瞭りするだけた。
○文章によつて本質の報飾を試みるものは、
弦どなくなるた。まず語彙の才を
備へ論者を感激させようと企てるしの
覚悟なくなつた。それは当然の帰向
であるが、しかし、頭脳の奥理性は、
訳詩を自分自身で行うし、心の動
情に富んでみれば、文章に自分
独と力が現なる誇びする。
○論文などの多くは勢筆無まれ、
まて、故意を描いた感じのするのは

諸君の頭脳心臓を主なさる所の
ものである。
○「拝座而已矣」とある言葉は、古来
偉き人家の食料主備として古(古き言葉の
一つである。
○文字の移詩は多く若しくは。
○実感を直なし方だけで満足する
ことは禁物だ。
○服仏初日の移動講義。
○今中期の続篇第一編
○精神的感じをお互の心に起させて
みたそうだ。
○旺盛なる読書。好きの点ん処を。
○手に形のみでも、愛しみが出るもの。
○私は疑を挿んだ。
○最早読者を捉へる力を有ってゐた。
○人間は環境の産物であると同時に

また幸運を持つ者は、老いた大仏の感慨を言います。大仏は、ふと老人の述懐を聞きます、そして同一人であることを疑わないものの、何かをそこに得る以外はありません。

そこで書生たる私も再び様々の書籍の中に、うずもれる感じでした。

ところで、この部屋は、隣室場所の床をこぼしてのたのである。

[illegible]岸地時雨を求めて、[illegible]

[illegible]は、横に寝ている[illegible]

[illegible]は、横に寝ている[illegible]

[illegible]は、横に寝ている

時事なれば七号所に在らざる事。
ぶを得たるは、時事の香味を失
う事。
○新事なる法調を真似たるは
に到はるなれ、
○人さまざまの児孔しき時代。
○兄弟互の就左又自、妥協好悪が除
すべなく今されたる。
○こゝに心酔しみたる達こと、若し
くは滅を感じさせる作る、
○現実描写、人情記ふた
感傷はに会んかろし、
○謹まやかなることろもする。
○見得も外耳しなうな
色気のない司法官で裸で銀座
の大通をおよぐやうな気持で書く
○鋳許な装飾のなくなる

拙き句の優れるにあらず、感情の千
個ひとつ。主観の最顕さるまでも。
○……一つ一つをみた豊かな詩趣を、眼
前に在る個を作者の心しんよ
忘れ得ざる真実の執着ひとつ。
かるがるしく取扱はれた。
○雪の景を偲けられた。
○作者自身の観察を素朴のみのまゝ、
写生無欲でうたひたい。
○情誠を主にの指導をお願ひ致します。
○おめんこだけはたべみたい。
○しらかつて。
○人間生活の煩はしさが拙字ちらんが、
○子その活動のせく、我をもし行き
見させてみた。
○四上に迅速の朝さらを耳さ、下に
清潮のちぎを耳す、ヨルオルス

手の詩をロずさみ
○一ぺんその著書に取
○支障が
○私の一生のうちで、最
○陸ち侍氏の
○家庭を
○詩を読んで涙
○日本、梁の
○清正公は豊家
○清正公は豊家
○手塚団一は
○左生三成は
○隆景は老
○小早川

この隆景公を一と朝事ある時の
總大將たらしめずして、誰れか
淀君秀頼、幼なきは十年以前
秀吉、西征をも乳臭児をもて
しは、豈忘れ難きことを述べて
十年以前隆景、
如何初め大合をなすに事を
諮れど、一武士を得ずして諮らざ
れ無猶九霊なる足かすとも。
乃ち軽進して銃砲を具へず。
短兵を交ゆるに接戦未だ
兵銭に利あらず。縦横奔駆
す。人吾皆倒れ、敗走是非に
きるのみなし。我兵時勢天
を動かす。而れ共なを不
る。斬首一系、孫を如我を
撃ちとす。
二一四、学者

○信長は徳川の英雄、天下を取るような持ち主という人なれど、
苛酷に失し、情を忘れるに至り、
寡黙の議を免れず、
○人なきを嘆じ、うつかりして自ら食われ
光秀、つを鉢まれる。
○他の在る候補数す。其心
仲々敏捷なるひ。信長の気
信長の炯眼は古今に絶す。
また看破を見抜くみる。
○後に大将となる器を用ゐさせ
ざるに、悪くの外に大捷を得ず。
草履取りします。今も軍前
で取る凡器をは絶する者。

○ 之得至未僕の病状を通じて
周萬の墓碑を想い描いてみた。
○ 蘇峰の海文に深遠なる思想
宿をみるものなど、蘆花の小説
に深刻、鋭利な人間描写は見
られないである。
○ 事情である。
○ 小春を迎えるにあたらしく思われる
みる。空想をはこしかった。世相
や人間を客観的に描写する。
手腕に驚かされるのである。
○ 人間の心の裏の裏を見ようとする
る目がそこにある。兄弟に対する
○ 猜疑には深いところがある。
○ 漣をみて、康を石の如き感じに
襲われる。
○ 蘆花の死、悲しい

○日頃 参拝しておられる人の凡
そに接した。
○河上肇・大山郁夫の訪文
○狭山の蘇峰氏らねに、詩短
をも其子言に見もがだし。
e 「今の暮の一は、日本に英雄豪
傑心の在るを知るに苦む」
○人間なしの世にしかなる形で、
英雄を豪傑しなしではある
ものもうるる。英雄に無用
しそれに引つかれ行くものである。
○竜馬男の英雄の身命もさる事
ながら、多くの犠牲の者
ある。
○剣陣代謝と存るのを見た。
○剣幸を生ぜる事。
○人間の貧欲の、豪欲計有欲
は古今を貫いて同様

。君と青年の幸福を祈ろうと思うよりは
抱える訳にはゆかぬ一元論を志すのは
けちなことである。
。老人は精神が硬化し、息の根も
この言葉も固定することを例とする。
。我は唐っ「モーゼ」という言葉を口
にしない。私は身心の亮類を
喪するに堪えないと云うことを
し、心に先ず芽が萌えるものだ」と
力説した。
。妻子に富める者が清く貧なる
ものなる。乾燥無味な理屈
一動作ごとには満足し得られ難い。
。文学評論も、文とは元来のや
うな文学の態度で、どれも
読みづらい。
。かう堅くるしく述べなければ、

所信が発表されないのは、つまり
○思考の長い手筆を不満に感じて、
自己の記念碑を自ら刻んで
不朽を遠さんと企つる気持になつ
たのであろう。或る最も著き
な題目を選んだ訪ひする。七年は
博士の決定奪集の調査と同
様である。
○論を俟つまでもないと云ふ感じはない
現世に、何事かの形に於て自己の
影を留めたいとする欲念を
誘起するものらしい。遺産、
葬儀、墓地のやうなは、自己の
一生の総括を墳墓に託する
意味であらう。
○然るに現実の事相を探索し

○ 女子は孤独の寂寞に沈んでゆく。

○ 昇燁等の所感のごとく、

○ 私達の境遇はなんと今の生活

と一層隔りのうすさを感じ

見度した計画実行好き私

と俄に見当らない。まさに空虚

な生活だ。空虚からの免れる

方法を何処の求むべきか、これ

今日の我々の肩に左右問題である。

○ 社私の眼を向けて。

○ 私月一度集まりたい。

○ 今日のやうな。晃君結婚の時。

○ 大に精神を集めて日夜心

を神にみたす。

○ 逝く春をおわれたしく夢の行

後の寂しさ

○ 屑屋屑屋と叫んでゆく。

。朝暁より夕陽
。依依たる静寂
さびしさ。
混雑騒擾の巷の依
なく、独り海辺を
。余程に論敵と試みんとするは
。意気の老軀を提さげ出
。老境にうろん人
。老杉しい最早
。老骨用に堪へず。
。諸説を挙げ
。諸論を
。要に一層深刻
。海鮮鏡利
。独立の海岸を
。有様の老翁

○老眼に依るものとするも尚且つ老視
用ゐます。自作
○老後の愚生に事業の記さるゝ
○老痛の筆者、
○病ん老痛の先祖の古狸と下名のかりは
筆の誌しやうがありません。
○詩の字句と図書
○とれも皆次に掲げる筆者
ルビ

○事急務に及んだ。
○年記と齢年に当る。
○陋見を述べる
○携帯を忘れた先方者七件に
○次年両と御かす所ある。
○難るをこゝに七拝けた。
○国執るもの今日に在ると、高論無
きことを承認さるを得る。

○議会中心主義を
振りかざし、
○時の権
○何々らしい、等称
多の形しい顔
○ここに批判したる
の事なきなし。
○去る権の辞する
○権下は初め
も書生を辞
○権まさに甚書
何んぞや
○甚中の一
○けだし。
○往って我等の
○この意味

○ 実に感慨無量なるの外なし

○ 特に生産組合なるものは
先ずもってと
○ 誠にしてしかも
○ 再び春天斜郊外に於ける豊年祭の
盛況を、喜調の裡に
一座の賑しさをかこった。
○ 庭の強い張作霖たれ死んだ一生を
得たとは言うものの、
毎日の訃音は傷ましの育児をして
生存の見安めがつもぬと報じている。
○ 一〜の治療は最早疑と安心の事
実である。
○ 隣邦の報道は元天直下の如くである。
○ 急ぎの好る要。
○ 誠至極取りたと祝そ好い。
○ 徒らそ。

○ 古な日本正々な、従ってます。
○ 委任"解"を言訳なくするための
訪ねを見抜く一心で実直する当
○ 又勿体ないくらい一心で実直する当
人の為でもなく、する筈の例外も
○ なしと諦めるしかない。
○ 即ち革命の勇気と慧眼を持つ者は、
勇気なき盲従の足許から
○ 必ずの堅い慎重な政党を
○ くずすことは最も危険である。
○ 浮かれた
○ 革命の潮見争われない。
○ 絶滅を期して
○ 浮かれた
○ 本門問題とソ
○ さぬ今日さ
彼地の形勢は

かえりみる。

○ 之が又ワシを危惧しておけば、
ホルモンのそれに意を強うするの許りである。

○ 疲労は存外之をあくことも合つて
休るもまた。

○ 歴史は回顧し尋日志士の不屈
不撓の活動を物語ります。

○ 半世紀の星霜と未曾有の注目、
先ず語る。

○ 力の未人の喜怒悲楽はまた
たゞ、如何に多くの花弁を(散らせば)
如何に不屈撓(忍)猛は実
ぬかからない。其忍猛は実
に紅旗の翁人は民族(俗)を
かうの優位おする。

○ 革命事業の疾起そして振
はぎるを虚言ゆめ、まゆ人の

なる作者を嘆
ず喜ぶ事も
○今さら思へば
○石原抗争の目
つゝ傍観する、
試合振りは真
もの也。
○多年の希望たる来月上陸、
○設の本望を達
静を乱す。
○設の気勢を殺ぐ、
○本望を果さない
感ずる。
○当場者の意気
ますさ
○戦評とは悪
中旬許、

○一望千里茫々として涯無きが
○幾度自ら珠を求む。
○自暴自棄を戒むべき事と
○狐を虎と意を投んじみた。
○人生の幸福と権勢とは、すこぶる
の前に跪き一生の栄辱。
○外交を持つ道を失しつゝある。
○外国の流行は、
○外有り窺うを許さず。
○従令の眠を驚かすに足る外観実
は持たず、自作
○外交問題を處するの具なく
如し。
○外口先を飾らずして外交官と称する
資格なしと言うも
○政の徳ゆえ責任、眼前の怨ゆ
す報ゆ。

○ 犯の議論は頗る劃々なるものあれ

○ 劃々の音

○ 大に外飾を捨てゝ

○ 鐘社一編すれば、

○ 隋球を概測すれ

○ 暑さは一日一日とかけ街道に

○ 動ゐ水底の涼しき夏の近きを

感せしめる

○ 外れ、多年世界を双眸に収めた。

○ 一陛駄吐たり。駄吐とも色とも。

○ 老最日々、牡人の如く節を曲げ

ゝうすし、

○ 餐辞を呈する。

○ 気とも毫吐の光景をり。

○ 臥褥の子、指鮮ル生硬相等

○ するは免れませんがまゝと七正をゝ。

○ 歴史も死するも甚だ一定の解すり。

。時の流れ（ながれ）は元（もと）より敏（さと）らず
。清記（きよのり）は言（い）うまでも無（な）き、沈着（ちんちゃく）
。先生（せんせい）は時（とき）の流（ながれ）に伴（ともな）う識（しき）を今（いま）に
流（ながら）えている。
。時（とき）の吉（きち）凶（きょう）もこれ事（こと）は云（い）わず。
。時（とき）の回（かい）答（とう）なし。
。時（とき）の説（せつ）を聞（き）いている。
。言（げん）句（く）句（く）無（む）量（りょう）の含（ふく）蓄（ちく）有（あ）り。
。法（ほう）文（ぶん）は善（よ）く含蓄的（がんちくてき）に書（か）かれる
。平野（ひらの）一望（いちぼう）眼下（がんか）に入（い）る。
。幸（さいわ）い頑健（がんけん）にして
。眼（め）光（こう）烱々（けいけい）人（ひと）を射（い）る。
。彼（かれ）の幸（さいわ）に施行（せこう）した。
。眼（め）光（こう）低（てい）迷（めい）微（び）す。
。赤堅（あかがた）の美景（びけい）、東坡（とうば）の名文（めいぶん）訪（たず）れ、
若（もし）くは酸壁（さんぺき）とやうはまし
。大丸（おおまる）毒（どく）は歌（うた）、燈（とう）の酸壁（さんぺき）。

。指紋の如きを書き
。祖衣祖食日夜耕
耘の苦労を計れん。
。壮時に邁往な行動もありたり。
并時に邁往な行動もありたり。
。天真と気質ある子供の日は実に旅
。天真と気質ある子供の日は実に旅
時である。
。捕虫使なる仔虫と吟まき来る冷風癌
。捕虫使なる仔虫と吟まき来る冷風癌
。とふ意味は外ならず、文が
。とふ意味は外ならず、文が
。菖蒲水に投られた河童は、
。菖蒲水に投られた河童は、
。我々は未だ嘗て虚心坦懐ですれたい。
。我々は未だ嘗て虚心坦懐ですれたい。
無暗に両侍を排斥する、宋襄の
仁を学ぶ必要は固より毫もない。
。要は共存共栄の原則に基き胸襟
を開いて、誠に手を握ることである。

○之を言いしるせば、
○みんなまちまちなく、犯人自身の精神
的欠陥か何題にするかも、更に
またこの外二、三の因をも考慮の中に
おく必要もある。
○一は全部に言うる当然の結果
人身攻撃の形式的なることをもあるが
ゝ零化な人身攻撃の形式的なることをも
庫日の精神を蔑、或は
三日の基礎を危くしたとも、
皇室の尊厳を冒瀆すと云、
いわれなき罵詈を口実のため
る相手の生存を全く否定し得ざるため
き感を抱かしむる。之に優る良法は毎日
生ずる沢山の死亡者を見ることなく、
心するのは、一つとして断る言葉は

○ 形式、簿記の精粋と一大文章のために錬磨(れんま)互に調和を得たるもの

○ 著者の口調ちょうと文字と絢爛たる筆致は他人の追随を許さざるべし、読むたび毎に深き印象を感ずるとともに、すべてと思ふ。

○ 読者の名を左右す。若読者に不相当なる程度を要求せば屁理屈と拒絶し頼みます。

○ 造詣深からず。

○ 誤植なく、

○ 製本美にして、手触り、手頃、軽量。

○ 認識をもつこと。

仏来告げ、
元
既に人心を去ること浅からず
時れ及ぶ。仏心皇は、東帰
二十五年を経し、今年今月の精舎
なり。諸天見、血眼を注ぎ
ふくるもの有ると雖も
こと、また世事に流通せざる
ゆえなり。予も将に去り、
地を行くを最初の安心とせん
土に仏宇を刻めるる心
を母親にこと、部屋にまもる、床の上
に坐て読を耳をみた。三の前にて
悟め家庭の有様か、今のまま私の
部屋にこもって居る。異例
で病気の時、世法になる位、身にし
みそうれしいことはない。
○真剣に遺言を書かうかと思ふん。

○スタコラ、さんは出ていきました。
○宿を、ある程度まで信用する。
は、許さるべきことなり。なんびと
英国社会の年いちねんたるもの。
○二人の朝食時間がモットリオ
んに着き、停車場に降り立つ
と、満堂立ち並ぶ歓迎。
た停車場、日
本国をまさに進発
の旬日をすぎず。
なるもの。
○それは広告と同
○おさいとお母さんと地下を、
同車にて起き
おかれる。
○おさいとお母さんに対する時なき感を
典子、自分の座
策をもやすもの
○、お母さんの批評

うまくさる計を神里さんゆかないと、
おんでいない失敗をすると思う
たかもしれない私一人の恥と
すめば筒構えするも、自分と全く
おて傷説すれば、自分の
ふえ先生に笑われる。ぷん
◎忘恩の謗(ソシリ)は免れまいぞん 大意
◎漏たく無辛に描へなへとこの
社会は生存おもろおしひろ
◎薄明うと混気と臭気とに
包まれて、青春は、とするな
と、先刻の痛恨的に調に戻る
ようす。(大意)
◎走り日に仰倍を着てたのか
何時も、用一髪の所び、叩かれ
◎言同は言う、祖は後、硬も
晴天、下ゆる精力の仮装

を中心とし、次
侍するにつけても、多
ねた事人まで感
とも。清い精力だ。
。人格の尊厳を保
。富豪の為慢に
を持つけるんは
。緑林大将の身
と型もある。文盲
ようなもの。てん12
。猟銃猟犬野
つまれた事人を
した名。現代は
石を征服する時
代気のない野人
時代。野

○張り武田信玄なれば、直情
径行の景佩子は、工作諫信
に長ず長寿たるもの也。
○その言は「張の強きは天性
なれど、備まずからざるべからず
強の撲を見るに敏なることは、
天下一流を抽んでることか
なる。

○まみ三十四軌の易性革命は、
凡て土匪放攻革裏戎なりとも
そのもの也なる。一時の未収に
は、ゆき辞戦を峰起し、その
中の強者が漸次辞士を任股
し、遂に天下を取る事と特す
る。○これ後世の作用ある
太祖と特せられ、聖祖と特宗
はるるゆえん聖天子の如く體な

先のだ。こうよ
一瞬する。
○明治両朝の歌
た。(奥輪の美
殿の奥深く起
をまかせ、黄衣を
生活な、一箇の
ばならぬ。事実
玉も違いなるも
りて、張な性
ル元々る旦那大の
とんは違いけ
○時代の変れは斯
情と趨向とを
お武家の作ら
だ。張作霖より

水流かに
歌会を催う
臥し、美妓
しめ宮
彼の
特代錯誤で
上事利用
の如く
の最後
人おびやも
感
調査する計
の指導者
没後、支時

代な矢脳ける。

○古今より大なる事実は別案
なり。時勢ひなりの神ある
理論ひなるのみ。

○いづれは元となし事実のあるあ
る。従て主義、

○仲なの同じ論題に基へるが如し。

○人生の歸趨に基へるが如し。

○就権の問題も竟事する所。

○二ノ生ノ歸趨を明まても
人心を教育し。

○各人をして安んじその天職に
遵遁せしむる刻さ私有、主
に解決の途なるべきことを信ずる。

○度相の見解に基ける直事も
同題の核心に解決せず

○往田に群衆、家を幸ひの
隣家嫉妬に堪えざるを感ず
○金ム私宅庭を
○一人の先い洗濯を
ム、お達に挨拶を
婦人をる。
○情事耳此上ない
○しかに借等の生
無理想ム、七年
ムるか今更ム
得ない信仰。
○言はどうか女からう。下宿屋の
ム縁ム死を待ち
死とムか、牛執
ム縁ム死を待ち
○上杉博士の憲法
ある。

書書夫を
ム
ム
ム

改正と読書が一たいどうして出来る。先ず少なく
借入筆生は 井出氏講師 昨年度の生徒
試験の暗記のため。本当の学問 勉強 転職のための勉強
こうした。みなノオトと、参考
プリントと、三銭の辰のこと 訓示と、
予定試験と、もう三度の話で終始
したのみ、十年前の古事書きの
頃 ひろたとうそうした点が多い。
大ざっぱな話。
訓育に時を割き設けられたの
さへ、いかに今日の生活 社会の表
面に出ずまでみうかがわれる。今日
の生活見は、社会科 社会科と、建設
倫理の生活を生活とし成る、諸
表は、文献そのものを改善し、社
会事業に携わり、このもの角
度と要求とある、 高度な意義

やすしも否定しない。この間
そのものを荒い海とし、血とし
そこを飛ぶ。この秋生活を古き
活をしようと。この時代が試
煩と勉強をする人生のあり方
して、青年とよく生きることを
感じるのは。書きそこなくしを荒
い川のことを現すとある。
借りはかつてふ今日のことを叫ぶ、
忠実に斬鬼の堪えない。僕
等今の活気とよべで健康あり
きたことを私たちは。
僕はお母さんと白かし
なければなりぬ。僕等のお母
さんと言うことを親が全く喜ぶ人
生の前のそこを思うとおさく

なく無一文になりました。借家は
お妹夫婦を御義しなく、しかも
是かぬ辣ひもの。借家は
枕もとうとう試験さい通れ
はなくなる。卒業すればそれ
で済んだようなもの。学校も先生も
講義もノオトも、皆三年の辛棒
だ。母とつぶらな本当すればよ
いと思うのだが。

今日の法文は、
本当無駄ばらの講義と抽しく大
ごうもつてメルヘンの事実のと立派に
やつのけてゐる。この人達かこのさで
ちやと共に一同でするにみして、横
浜の貧民、本当を心配する
年度在学書を返き持つた。

これをこのまま外の生活を
見ると、借金のた
生活者には及びもつかぬ苦労のは
生活をしまする。借金の来
音会周りのつらさ法律の矢を
も、折からおとその見に行くか。
今日のそうじ時間画研究会の
ないこの我は少しもさびしくもある。借
るのは妾まこの我
今に怪がな猫を耳を嘆き
したもう女ー今日のうを話さ
はタキレイだを角を自ら味以を
鳴ーしー」「やぶを
借金のこと
唐妻に書
唐妻なこはし、今日の
諸兄は、蓋書
て飲んでる。借金のスポーツは
大その社期まで

さん）きたれるん。今日の話をんは
神宮のファイル係事務員ほう真珠の
撮影を改めに来てみる。一言で
考えのおうまと僕するをこぼしう。
且つ僕らは映画とスポオツを知
らなかつたこのをひもちる。今日の話実
は映画とスポオツかすけれは生
きて行けぬ人達である。
二万のノオトを見ま、

○おお、熱血悲涙を身の母に
注ぎかした先健先生の
霊土、
○髭を辛とする変しい、
○暴虎馮河の言、
○敦諫するも先生へ敦而
するん、

行きそびれた
12、

○校正、校友接詰、
○杜撰ヅサン
○神なき人には、歓喜なし
○江戸の敵を長崎で討つ
○鳥なき里のコウモリ
○倒行逆施
○成功の喜び有り
○幸自頑健
○見ゐ傷日、一耳とし傷計、
○日暮れて道なお遠し
○適生き産症
七遠慮なく言ふ
○虚心坦懐
○拙宅御用の節

白雲去来意已混混
対なし
鴨中無便なし
白鼠と青服
正与夫正与婦
匪徒を勤滅し匪流を勦力ー
逐豚の至
真珠美
曲線美
之體美 六二六
時間美 六二二
空間美 六二〇
空前絶後 六二〇
空名を空言を 六二二
窮措大 六二五
之江機関 六二七
之鮮を 六二八

竹林七賢
（ヒツ）
簡閲點呼
（ヒツ）
（ヒツ）
簪纓の文
（ヒツ）
簪裾重更
（ヒツ）
（ヒツ）
杉巻神身
（ヒツ）
（ヒツ）
粗末
（ヒツ）
（ヒツ）
（製塩法）
（ヒツ）
（ヒツ）
粟粒
（ヒツ）
（ヒツ）
粟粒
（ヒツ）
散墾土の
（ヒツ）
（ヒツ）
（ヒツ）
精神
（ヒツ）
節文
（ヒツ）
（ヒツ）
（ヒツ）

書き屑の肥料 二日ニ
言い、模倣 とし言する花はす。
カラウ
音開に集れたる事すれば、
此時を宣しく音開に来ぬべし
冥土の地獄音遊しし晩節
を尽さまぐきなす
荒唐無稽の説を唱ふ人
も、惑はす。荒唐無稽の先
カラウ
情を勝漆も当なる
譏誇妨々として敢一する所なし
痘死糸々として絶へず 糸斗 絶
事件は唐一唐糸斗 ニ連ぬ。
疫は益々紛糸ニ至ル 紛糸
全紐 の割衣服
報恩を全うしたい素乳は。
素門にそもそも供、家
素の封、山形中の素の封耳
素志 毋 徹

レイソウサン

○戸倉まで送ってくれる人（緑なすびと）

○東京の店先を見れば

○素寒の感なきを得ず

○細元同志の会友。

○素寒たる心地ひとしお。

○幾日久、

○幾夜一日の如く絶望の状態

○幾夜の如く往来絶望の街

○絶体絶命、

○年寄幾人

○幾夜の如く絶望の状態

○過去七年方

○元年は荏苒

○荏苒と

○荏苒と

○荏苒と

淡雪の荒屋にて泊る

荒神と尊と比較をされた性急
銃肌鋳鉄、銃心鋳鉄、銃肝鉄心

善悪の意味をおもふと座訶かな
優しさとはいへぬ中には銅臭の花

注ぐもするよ。

恩誼は銃肝性文

事云ふまでは苟且偸安の筆を
講するは愚なり（一時のまにまわし）

苟安策を講ずるは愚なり。
苟且財のこと
苟且を主とするは家老の職なり

千騎万騎
英明果断の人でなかつた

荒涼たる景色、可前者羅を張る

耳垢の談、

妙な花それを安心は全く相
憂に過ぎずして奢気は後れ
法笑のうちに秩序よく「母」はれた。
そうまりのオン
岡極の恩、父母の恩

天涯地角のサラナクとも
もとは。

○……就は、事ム一般の興味をそそるか
も知れないと思うところから……一す
紹介とみまう

○庶業者諸氏、……私達はかう
かんがえる。

○……三十倍とゆすばかりしい勢ひで
お売する人波には、全くやりきれ
ない

○職業にみする自覚が両ケ条の
はたのもしいことではあるが、近来
不景気の反映で、一時的の現象で
はないかと思へば誠にたのもしく
なる

○突然行方不明となった。警察へ、
許嫁と、七ったら、彼が行李と

かつこと待ち構へ行く姿を見たとよ
のか一人みた。
○次前に時々あることでいとりとよ
双、別に心配しなくてもいいとよ
なった。
○詩めを擬人の表に好ましくする。
○暮くべき来ばはじ。この調子で
まったらものになると思った。がうな
を
つ心が躍る。彼はみえの巣に戻
つて来たという譯
。こんな楽しい希望もあれはこそ
ドウトゲーエの苦しみ位、番の一刺
しに過きないのである。布施無限、
華々しい口演通信網の活用舞
先は、彼等の眼を用意ることみる
スピード時代の今日、玉ころのオプレイ
チーの活躍に期待さんところか
ら。彼等の意大なる抱負

いちべたりかた
○五パセントの聴衆を納得させ感動せ
なければならないから。
○彼等の言えばはものすごい。(珍達)
○それはお陸の表頭の悪口を直信し
た子供の方。かぶかわれても旁の
女人から一仰宇気なので、みな
可笑しいとしかそれは笑っている。無
邪気なものである。
○君、直会は生ぬるいから不安なよ。
○一週九時の実践練合わせ。
○近代和楽の交響楽は元人とと
ふへるにすばらしい魅力がある。
大先生。台を形
ひかれる。
ゆるやかな優越感

○世の志ある人々や、悲しみ、悩める人を『電光』る事の為に、便を得ずして再び訪ふと約束して、後ろ髪を引かれる思ひをなすことなく、重ね重ねと、正人君子と知るや、否や、社会の神経衰弱者たる商売の様式は、一刻の猶予も殷しなく、急を要する用事のある時は、

○多忙な職業婦人の唯一の慰安をオ一把に実現せんと行く後ろ姿は、実に勇ましいらしい。殊に美しさは真、勇ましい。

○将来職業婦人として立つ、ことに職業婦人を職業にするに理解ある舞台を将来に資すべき。確固なる信念を腹そなふる。だから彼女等は男子に優れる仕事を成し得るのである。

○今や働く女性を必要とする。

とする。この意味において彼の考えは卓のモダン、かつルネッサンスの人であるということができる。

朝日の、春五、二十七、

葬式

○ 後藤伯その人の所説に餘り感服せず。且つその人物に立脚する人物に立脚するが疑ふところすくなし。

○ その主旨は自重ということ動かなかりき。

○ ……みとは、基督せまりくる一刻する様に考えた。

○ 後藤伯の両国駅の演説は風行雲集の勢ひをもって天下を席巻した。

○ 星逝き魂をとどめず攻撃。

○ この真理は存在するとの真理を探求する。

○ 新聞紙は報じた、

○ 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

○ 一人は葬儀を終へ。

○ 自らを引き立てるようなことをなるべく
○ 慎しむこと。
○ 一挙一動と第一印象。
○ 言葉と動作の一致のこと。
○ 言葉の発音の注意と訛の事
○ 言葉の使い方の注意。
○ 病気を研究しつつ適切な
○ 看護をすること。
○ 看護婦さんの早く来られ
○ ることを望むこと。
○ 病人の看護に必要な物件。
○ 寝具（敷布、掛布）の取り扱い方。
○ 便器を取ることは望ましくない。
○ 耳目を驚動しない事。
○ 言葉の訛さ注意をすること。
○ 元の代を忘れないこと。
○ 親しき中にも礼儀ありの意味にて
○ 看護婦たるもの

水ぶくれでもできる。

○足の甲との中の花心は丸く

ふくれ、

○清郎耳は口をきかぬ故、

変な

○英吉の妻寅結婚旨を

耳のもんだ

○沖三世の歌姫、アグネス宮川主る、

○移住文明の羽化登仙

○その歌会始を海軍として先づ告

げられ、無事が上皇后を始め奉

らせられ、皆々様が詠み

出でられ、次いで更々お進め

普通の座敷となる仕掛け、

さして勅命の栄を重ねて

重複大廈は大棚葉の煙

かなえたを焼き書ー
まる心曰し、
ニをなりし世彩ん
足らすは、工なりと生ん
ニ在なきくなり。

○ 加流庵の事祖ニ入ん
封事は、慷慨激切、まん
見なん。

この年文は、積疾沈痾、而
持たん ー おんまり。 みき ハモン

○ 感仮多量、口ニ両かは彩手
ニ言ニ天漢棒なるひきものと
君いて罷んん病あん此辞文
○ 柱月ニ又ん、